

「兼盛と忠見」く和歌説話を讀もう

() (年) (組) (番) 名前()

天徳の歌合の時、兼盛・忠見、共に御随人にて、左右に番ひてけり。初恋といふ題を給はりて、忠見、「名歌よみ出でたり」と思ひて、「兼盛もいかでこれ程の歌よむべき」と思ひける。

恋すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか

さて、既に御前にて講じて、判ぜられけるに、兼盛が歌に、

つつめども色に出でにけり我が恋はものや思ふと人の問ふまで

共に名歌なりければ、判者、判じかねて、暫く天氣をうかがひけるに、御門、忠見が歌をば、両三辺御詠ありけり。兼盛が歌をば多辺御詠あけりる時、「天氣左にあり」とて、兼盛勝ちにけり。

忠見、心憂く覚えて、胸ふさがりて、それより不食の病付きて、憑み無き由聞こえて、兼盛訪ひければ、「別の病にあらず。御歌合の時、名歌よみ出だして覚え侍りしに、殿の、『ものや思ふと人の問ふまで』に、『あはや』と思ひて、浅猿く覚えしより、胸塞がりて、かく重り侍り」とて、遂に身まかりにけり。執心こそよしなけれども、道を執する習ひ、げにも覚えて、哀れなり。共に名歌にて、『拾遺』に入れられて侍るにや。

※「沙石集」巻第五末ノ四「歌故に命を失ふ事」新編古典文学全集52より

天徳の歌合の時、兼盛と忠見が共に御随人(近衛府の官人)として左右に一对となった。「初恋」という題をいただいて、忠見は「名歌を詠み出せた」と思つて、「兼盛もどうしてこれ程の歌を詠むことが出来ようか」と思つた。恋すてふ…(恋をしているという私の浮き名はすでに人のうわさとなつてしまった。人に知られないようにひっそりと想っていたのに)

そして、既に御前で講じ、判が下されようとしていたが、兼盛の歌に、

つつめども…(忍んでいたけれども外に表れてしまったよ、私の恋は。物思ひをしているのかと人が問う程にまで)

共に名歌であつたので、判者は判を下しかねて、しばらく帝(村上天皇)の御意向をうかがっていたが、帝が忠見の歌を二、三遍口ずさまれたが、兼盛の歌を何遍も口ずさまれたので、「帝の御意向は左にある」と兼盛が勝ちとなった。

忠見は落胆し、胸がふさがるような思ひをして、それから不食の病になった。快復の望みがないとの話を聞いて、兼盛が見舞いに訪れると、「病氣というのは、実はほかでもない、御歌合の時、名歌を詠み出したと思ひましたのに、あなたの『物思ひをしているのかと人が問う程にまで』という歌を聞いて『ああ』と驚き、胸がふさがつてこのように重くなつたのです。」と言つて、ついに亡くなつてしまつた。執心はつまらないことであるけれども、道に執着する習ひはもつともだとも思われて哀れである。共に名歌で、『拾遺集』に入れられているのでしょうか。

【注】

- ・つつめども…「拾遺集」「袋草紙」とともに、初句は「しのぶれど」になっている。
- ・この話は「沙石集」以前には所見がなく、作者・無住の創作の可能性も考えられる。